

# IMAJ

NEWS NO.90

発行人 相馬 雪香  
編集人 柏原 征則  
頒 価 1部200円

July 1999

## MRA ワールドニュース 世界のMRA - 最近の動き

### アフリカ

ダル・エス・サラーム



### タンザニアでMRA国際会議開催

去る5月12日から17日にかけて、ダル・エス・サラームにて、タンザニアMRA協会主催による汎アフリカ会議が、汚職問題、そして、和解のための課題ということに焦点を合わせて開催されました。エチオピア、ソマリア、スーダン、ケニア、ウガンダ、ガーナ、ナイジェリア、シエラレオネ、ザンビア、ジンバブエ、南アフリカ、コンゴ、ルワンダ、タンザニアというアフリカの14ヶ国に加え、ヨーロッパとアメリカからの代表等100余名の参加者の他、外交官も参加しました。

ウィルソン・マシリンギ国務大臣は、その開会の辞の中で、「この会議は時宜を得ています。タンザニア政府は汚職反対の国民行動を表明しようと、アイデアを探していたところ。変革をもたらす人々として、MRAの方々は、先ず自分から始め、社会のあらゆるレベルで新しい動機と人間関係をもたらそうと働かれて

います。我々政府も皆さんと一緒に働くところ積もりです」と述べました。

会議は、新聞、そして、他のメディアでも広く取り上げられました。タンザニアMRA協会会長のエドワード・ミナ大使による記者会見の後、『デイリー・メール』紙は、「憎しみと恐れとどん欲から解放された会議が

今週開催される」との見出しを掲げました。『ガーディアン』紙は、タンザニアのエリナザ・センドロ司教の発言を引用し、「宗教指導者も和解の役割を担うべき」との見出しで応えました。『デイリー・ニュース』紙は、ソマリアのユスフ・アルアザリ博士の「この40年のアフリカのリーダーシップのどこが狂ってしまったのか」という話を一面に載せました。

会議では、現在の多くの問題を見つめ、率直な意見交換を図りました。毎朝1時間、ケニアのアシュイン・パテル氏が『私のところへのメッセージ』という会合をリードしました。ケニアでのMRA主導による「選挙浄化運動」の報告を聞いて、タンザニアの参加者たちも、来年の選挙を前に、汚職行為を防ぐために同様のキャンペーンを始めようと決意しました。

(MRA英文情報紙ワールド・ブレティン6月号の記事より翻訳)

### ■主な内容■

#### ◆MRA ワールドニュース・1-4P

- ・タンザニアでMRA国際会議開催 (タンザニア)
- ・ジャムシェドプールのMRAの活動 (インド)
- ・コー世界大会'99開会 (スイス)
- ・心のわだかまりを捨てて一新たな出発への誓い

#### ◆第22回MRA国際会議レポート・5-8P

- ・私たちにできること
- ・MRA国際会議に参加して/マリアンネ和田

#### ◆事務局通信・8P

## インド

# ジャムシェドプールのMRAの活動

インドの大きな産業都市のひとつであるジャムシェドプール市では、MRAの様々な活動が行われています。インドのMRAチームは、インド・パンチガーニのMRAセンターで毎年開催されているMRA産業人セミナーに毎回、市内の多くの企業の労使双方からなる代表団を送り、目覚ましい労使関係の向上を達成してきました。同時に、ジャムシェドプール市においてもMRAが4日間にわたる『人間関係』のセミナーを開催してきており、例えば、大手鉄鋼会社のタタ・スチールの2万2千人の従業員のうち、これまで1万6千人がこのセミナーを受講したとのこと。やはりパンチガーニのMRAセンターのMRA青年会議に参加した青年たちが中心となり、青少年問題に取り組んでいる他、他の宗教への偏見を持たないよう、異なった宗教を持つ子どもたちが一緒に様々な宗教の寺院を訪ね、理解を深めるといったプログラムも行っています。また、農村開発にも取り組んでいますが、それは、たんに物的援助を与えるというのではなく、農村に住む人たちが考え方や生き方を変えることにより、自分たちで村の生活を向上させていけるよう、まず、心の開発を促すという活動方針で行われています。



次に紹介するストーリーは、MRAの英文機関誌、フォー・ア・チェンジ4/5月号の記事を翻訳したのですが、この考え方を示すひとつの事例となっています。

## サルボニの学校

インドのサルボニ村の初めてのカレッジ卒業生として、サナット・マハトは都会で職を得たいと考えていました。そこで、彼は就職のために力になってくれるだろうと聞かされていた医師アミット・ムクジーを訪ねて、ジャムシェドプールという近くの町の病院に出掛けました。

ムクジー医師は、マハトの村の子供達に、彼が得られたような教育の機会を与えてやったらという、予想もしていなかった決断をするようマハトに促しました。

当時、マハトのいた、サルボニ村には、まだ電気も来ておらず、また、学校もありませんでした。村は、ハイウェイか



●サルボニ村の学校の前に立つサナット・マハトさん

ら5Km近くも離れた所にありました。従ってマハトがカレッジを卒業したのは、かなりのことをやり遂げたと言えます。ムクジー医師が、都会での就職の代わりに、村に帰って学校をつくるべきだと言ったことは、マハトにとって、かなりのショックでした。

「彼に仕事を与えたくないの、村に追い返そうとしているのだとマハトは思ったかも知れません。しかし、インドの人

口の70%は村落で暮らしています。そして都市部には、何千という学卒者が職を求めているのです。そして、これら学卒者の殆どは、結局、低賃金の事務員や給仕で終わってしまいます。困難な環境の中で勉強して来た人にとって、このような現実、あまりにも気の毒なことです。同時に、私としては、村落部で教育を授けることは、実に大事なことだと考えたのです」とムクジー医師は言います。

ムクジー医師とその友人3人が、毎週末、スクーターでサルボニ村を訪ね始めた時、マハトは、彼等が、自分の村の人々を本当に援助したいと思っているのだということが分かりました。「マハトは父親に、小さな土地を提供してくれるよう頼みました。我々はロータリー・クラブから、学校の建設資材費として、1万ルピーの寄付を得、マハトとその友人たちは、茅葺き屋根の細長い、一部屋だけの建物を建てました」とムクジー医師は言っています。

その学校は、1987年に、生徒12名で開校しました。マハトは、授業料を低額にし、生徒は制服を着用すべきとしました。そうすることによって、生徒がプライドをもてるようになると思ったからです。生徒達の親もこのため、苦心してお金を貯めました。制服はちゃんとした学校に通っている、ひとつの証しだと考えたからです。

この学校は、今や生徒数60人となり、外部の機関からの援助もあって徐々に発展して来ました。「ジャムシェドプールのタタ・スチールの労組委員長も、この学校に大いに感銘し、中等部の設置のため、40万ルピーの寄付を約束してくれました。残念な事に、その後、彼は殺されてしまいました。会社側が彼に代わって、この寄付金を出してくれました」とムクジー医師は語っています。

1998年3月に、この学校の最初の卒業試験が行われましたが、受験者の90%が合格しました。ムクジー医師は、このプロジェクトの成功は、彼が学生であった頃、たまたま出会ったMRAの考え方から学んだ『生き方の術(すべ)』によるものであるとしています。「世の中が間違っていると、他の人を非難する前に、先ず自分がどうであるかを省みる事を

学んだのです」と彼は言います。また、彼は毎朝、『静かな時間』を持ち始めました。そうすることによって、「素晴らしくて、建設的な、そして、奮い立たされるようなアイデア」が得られるようになりました。以前には、しばしばお酒で問題を起こしていたマハトも、彼と同様に『静かな時間』を持って、自分の生き方を省みる様になりました。

ムクジー医師とMRAのチームの助けにより、別の村では養魚が盛んになり、又、別の村では、民芸品を村の特産品として発達させるなど、それぞれの村の特性を活かした開発援助活動が現在も盛んになされています。

尚、ムクジー医師は、日本との交流にも関心を示し、「もし日本からMRAの方々やジャムシェドプールに來られるようだったら、ジャムシェドプールのMRAの人たちは勿論、このサルボニ村の学校や他の村にもお連れして、子どもたちや村人たちとの交流も図りたい」と言われていますので、関心のある方は、是非、MRA事務局にご連絡下さい。

## スイス

### コー世界大会'99開会

MRA コー世界大会が、去る7月10日に、スイス・コーのMRA 世界会議場「マウンテンハウス」で開会しました。

今年は、「心のわだかまりを捨てて-新たな出発への誓い」を皮きりに、「産業人会議」、「都市問題コンサルテーション」、「和解のための鍵を求めて」、「21世紀を見据えて、新たな目標や価値観を探るための会話」まで、約40日間にわたって開かれています。次回のIMAJニュースではコー世界大会の内容を中心にお伝えする予定です。

## 心のわだかまりを捨てて-新たな出発への誓い

1999年も残すところ、あと、半年足らずとなりました。『心のわだかまりを捨てて-新たな出発への誓い』は、本年のスイス・コーのMRA世界大会での総合テーマでもあり、西暦2000年という大きな節目の年を新しい精神で迎えるために、自分の変わるべき点を見だし「心機一転」することにより、新しい希望につなげようという趣旨で、イギリスでも一つの社会運動として展開中です。今回はこの呼びかけに応えた、オーストラリア・メルボルンのルイス・アブラハムさんの体験をご紹介します。

**私**は、最近、手術をしたためよく眠れませんでした。若い男性が上の階に引っ越して来ていましたが、どんな仕事をしているのか、帰宅時間が全く不規則で、帰るたびに、床板を重いブーツで踏み鳴らし、テレビをつけるのです。それも大きな音で！

ある夜、午前2時頃でしたが、もう我慢出来なくなりました。上の階に行って、ブーツを脱いで、テレビの音ももう少し小さくして欲しいと丁寧に頼みました。彼は乱暴な口調で、「俺は自分のやりたようにやるんだ」と言ったのです。



相変わらず続く騒音に、とても悩まされました。その後、彼は若い女性と暮らし始めましたが、それは新しい奥さんでした。この2人にまた頼んでみました。彼の態度は相変わらずでしたが、奥さんの方は少し同情的でした。騒音は一時的にはややおさまりましたが、また直ぐに元に戻ってしまいました。私は怒りと憎しみを覚えるようになり、警察に助けを求めたらと考えたりもしました。

そのうち、彼等に子供が生まれそうなのに気づきました。「赤ちゃんのためのプレゼントを彼女にあげたら？」という全く予期しない考えが心に浮かびました。しかし、「何で私がそんなことをしなくちゃいけないの？」と言うのが、私の最初のリアクションでした。「お互い敵同士なのに！」しかし、突然浮かんだこの考えが、心から消えることはありませんでした。

お祝いの品を渡すと、彼女は私に抱きついてお礼を言うと共に、今までどんなに自分が孤独であったかと話すのでした。彼女はお茶に呼んでくれ、2人で気持ち良くおしゃべりをしました。

後に、私とそのアパートから引っ越した時、彼女は荷造りを手伝いましょうと申し出てくれました。また、その後、ご主人の方も私を呼び止め、礼を述べ、そして驚いたことに、騒音で迷惑をかけて申し訳なかったと謝りました。彼は、自分たちもシドニーに引っ越すので訪ねて来て欲しいと招待した上、なんとその旅費の負担まで申し出てくれたのです。

事態が全く逆転してしまったのに、私は目をみはりました。最も驚かされたのは、お祝いを手渡した瞬間、怒りの感情が消え、厚い感謝を受けるとともに、彼等に対する心からの愛を感じた事です。彼等は今、シドニーに住んでおり、お互いに連絡を取り合っています。これは、私たち三人すべてにとっての癒しの体験となりました。

## ◎第22回MRA国際会議レポート

# 私たちにできること

去る5月22日・23日の両日、第22回MRA国際会議が「より良い21世紀を目指して：共に築こう世界家族」のテーマのもと、延べ70名の参加を得てアジアセンター ODAWARA で開催されました。

この会議では、私たちの身近な問題からグローバルな問題に至るまで、私たちが抱える様々な課題を21世紀に持ち越さずに、心機一転して『自分たちから』『自分一人でも』解決して行こうという決意と、そして、その決意を実践・実行に移すということを目指し、2日間の日程で行われました。教育・NGO関係者を初め、外交官、政治家、学生、ビジネスマン、主婦、そして中国、韓国、イギリスからの日本在住の外国籍の方々に参加しました。海外からは、オーストラリア、台湾、韓国から計8名のMRA関係者がゲストとして招かれ、世界の人たちと共に、全体会議や分科会などを通じて、家庭や家族の在り方を初めとした教育問題と青少年の問題、そして、環境問題や国際関係の問題等に至るまで、今、「私たちにできること」を考えました。



## 『世界が家族』であることを破壊してきた世紀

「20世紀後半を振り返ると、この50年間、私たちは『世界が家族』だったことを破壊してきたのではないかと。旧ユーゴ解体に伴う内戦で様々な経験をされてきたベンジャミン・マーキン駐日ボスニア・ヘルツェゴビナ大使は、全体会議のスピーチの冒頭でこう指摘した上で、次のようなメッセージを私たちに発しました。

「ボスニア・ヘルツェゴビナでは、戦争によって3つの主要民族、ムスリム人、セルビア人、クロアチア人に大きな亀裂が生じました。多くの村や町、そして都市が破壊され、人々は生活することさえ出来なくなりました。そして多くの尊い人命も損なわれたのです。この戦争による最も大きな犯

罪は、家庭、家族も破壊してしまったということです。多くの家族が離散の悲劇を味わいました。妻と夫、そして兄弟姉妹が離ればなれにならざるをえなかったのです。こうした状況は、精神的、心理的に生涯消すことのできない心の傷となっており、今後永きにわたって人々の心の中に残ります。これは、一世代、あるいは二世代に亘って償わなければならない代償といえるでしょう。非常に多くの人々が、『どうすれば手を差し伸べることができますか?』とお聞きになります。これが確実だという答えは確かにありませんが、ただひとつだけ言えることがあります。

それは『傍観』しているだけではダメだということです。つまり、『私たち一人ひとり』が何かをしていかなければならないということです」

全体会議の後、『教育』『環境』『国際』と3つの分科会が設けられ、2日間にわたってそれぞれが問題意識として持っているものを出しあい、それぞれが抱える問題の解決への糸口をさがり合いました。

「教育」の分科会では、「子どもたちのために、我々はどうのような家庭、学校、社会を提供できるか」のテーマで2つのグループに分かれて話し合いが持たれました。「家庭崩壊の



●会議の合間に談笑するマーキン大使（写真一番右）

時代」と言われている今、子どもにとっての家庭が、安らぎの場、許しの場、そして、癒しの場であって欲しいということと、同時に家庭は、しつけや、子どもが社会に適應していくための準備をしていく場でもあって欲しいという願いをもつ方々が多くを占めました。また、実際に教育の現場に携わる方々からは、現象面として、学力低下、いじめ、登校拒否、先生を先生として認めない生徒たちなど、教育現場の実情が述べられました。そして、戦後、効率一辺倒で突き進んできた日本社会の中で、ひたすら物質的な豊かさを追求してきた中で育った親と、そうした親に育てられた子どもたちにとって、バブルが崩壊した今、真に望ましい社会の姿と、どのような生き方が人間として望ましいのかを模索しあいました。

### 『啐啄同時（そったくどうじ）』

現在、母親心理学講座の講師として、テレビ出演を初め各地での講演などで活躍されている高柳静江さん(新家庭教育協会理事)は、「親は子供の人格を否定しないで、『啐啄同時』（『啐』は雛が内側から卵の殻をつくこと、『啄』は親鳥が外から殻をつき破ること。啐啄が同時に行われるのは、そこに共感するものがあるからという中国の成句）で、育つのを待つこと。そして「私が子供だったら」の視点に立って、「許されて許す」。良い大学に行って良い会社に入る事ばかり

が子供本人にとって本当に幸せな事なのかどうか？もっとひろい視野を持って、柔軟で、温かく、そして大きな愛情で子どもたちを育てたい」と述べました。

『教育』の分科会では、出席者相互に共感する部分もあれば、意見がわかれる部分もありました。しかし大筋で多くの参加者が共感した点として

1. “しつけ”の教育は、家庭内で子どもが小さいころから行う
2. 「社会のルール」を子どもたちに気づかせ指導方法が必要
3. 子どもの良い部分に着目し、悪いところも、言葉を選んで注意をしていく
4. 子どもが変わるには、先ず、親が変わることなどが挙げられました。

### 『意識』と『価値観』の転換

『21世紀のためのライフスタイルを考える』のテーマで話しあいが行われた『環境』の分科会では、昨年に引き続き、全国的に講演やセミナーを通じて、地球環境について啓蒙や提言活動を行っているネットワーク“地球村”の立山裕二講師をアドバイザーとしてお迎えし、地球環境問題という大きな危機を回避するために「私たちに何ができるのか」を考え

## MRA 国際会議に参加して

マリアンネ 和田

約30年ぶりに訪れたアジアセンター ODAWARA はやけに小さく感じられた。たぶん私の体が大きくなったからだろう。久々の国際会議参加に多少不安を抱きながらも、エネルギーに満ち溢れる参加者の顔を見た途端にその不安もどこかに飛んでいってしまった。

以前の会議の記憶よりも規模ははるかに小さかったが、そこから流出されるエネルギーは以前と同じに感じられた。参加者全員が同じ目標、つまり新しい21世紀を築くという事に向かってエネルギーを集中していたからだと思う。この素晴らしいエネルギーをいかにこれか



●環境の分科会でコーディネーターを務めるマリアンネさん（写真一番左）

らのMRA活動に活かしていくかが、今後の大きな課題だと思う。これからの21世紀を担うべき若者たちを、MRAの精神に則って育てていく事なのではないか。そのために、私たち大人は何ができるのであろうか？もちろん、自らの心のわだかまりの整理から始まるのであるが、自分の生き方が若い人たちの模範になるような生き方をしていきたい。

今回国際会議に参加をして本当に良かったと思う。次回会議にはもっともっとたくさんの人たちに来て欲しい。

ていきました。気候変動による地球温暖化の影響によって南極の氷がとけ、南極大陸崩壊の際発生する津波の影響から現存の原子炉が破壊され、これがすべての生態系破壊につながるかもしれない、という恐い話からスタートした『環境』の分科会では、原子炉問題の意外な背景も学びました。また、私たちの最も身近な問題として、ゴミ問題なども話し合われ、立山講師は参加者に次のように問い掛けました。

「私たちは、つい先程まで食事中に『おいしかった』といって食べていた『ごちそう』を『ごちそうさま』といった瞬間に生ゴミに変えてしまいます。なぜ、『ごちそう』が『生ゴミ』に変わってしまうのでしょうか？『ごちそう→生ゴミ→汚い→捨てる』と考えると、捨てることへの罪悪感がなくなるような気がしませんか？『ごちそう→栄養→もったいない→食べ残しをしない』と連想してはいかがでしょうか？生ゴミは『栄養』であり、しかも『お金』であると考えたと自然とゴミの量も減り、結果として環境に優しいのではないのでしょうか？」

また“ライフスタイル”についても、“ライフスタイル”を無理矢理変えようとすると、とても大変です。苦しいばかりで長続きしません。こう考えてはいかがでしょうか？“ライフスタイル”は変えるものではなく、変わるもの。“ライフスタイル”が変わる前提には、“意識”や“価値観”が変わる必要がある」と述べ、“ライフスタイル”のみならず、環境問題を考える上で、私たちの“意識”や“価値観”の転換の必要性を促しました。この分科会に参加したある女性は、「昨日までは、行政がやってくれると思っていたが、この分科会に参加して、『自分からやっていこう』と考えを変えました」と自身の気持ちの変化を述べました。

『国際』の分科会では、「相互理解と平和をもたらすために」のテーマで話し合いが行われましたが、心を開いて相手を理解しようと努めることが、国際交流へのスタートであり、また「誰かがやってくれる」と考えるのではなく、「自分がやる」という気持ちを持って、どんなに小さなことでも具体化し、出来ればそれを楽しんで実践することが大切ではないかという結論がでました。また国際交流をする上で、「それぞれが自分の国の歴史というものを背負って生きているが、歴史を語り継ぎ、残していくということはもちろん大



●『国際』の分科会の様子

切だが、もっと大切なのは、許していくこと。憎しみを継続させていくということは、決して正しいことではなくて、そこから何かを学ぼうとしてこそ価値がある」などの意見が出ました。マーキン大使は「最も悪いことは、傍観することです。どんなに小さなことでも出来ることを具体化し、そして自分に何が出来るのかということそれぞれが考え、決意をし、実行することが大事なのです」と述べ、分科会の中でも改めて私たち一人ひとりがもつ役割の重要性を強調しました。

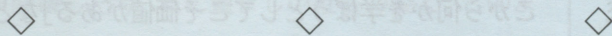


初日の夕食の後行われた懇談会では、現在、武蔵野美術大学大学院で勉強されているワン・カイさん（中国）の水墨画のデモンストレーションや、日本、台湾、韓国の参加者の方々がそれぞれ歌を披露し、会場が和やかな雰囲気になりました。また、こうした雰囲気を察して、立山講師も、用意していた資料を脇におき、いくつか詩や歌を披露してくれました。また立山講師は、『違い』ということについて次のようなお話をされました。

「今、世の中では、『違い』について次のような流れがあると思います。一つは、『違う』ということをもっと認めて認知したとします。そうすると、本当は私たちが生まれてきた目的というのは、『違い』というのを認知して、認め合って、分ち合って、活かし合って、そして最後に一体化して融合するという道ではないかと思います。ところが、今はどちらかというと、『違う』ことを認知して、それを分けて、区別して、差別して、奪いあって、殺し合うというルートに進んでいるのではないかと思います。さらに、『違い』を認知したけれど無視する。そして、さらに違いということにすら無関心。ということは存在そのものを否定している。こういうことが

最近の世の中にあるのではないかなと思います。だから、私たちが、やはり「違い」というのは当然ある。個性としてある。それを認め合って、分ち合って、活かし合って、一体化する方向にぜひみなさんと一緒に行きたいと思っています」

最後の全体会議・閉会式のセッションでは、参加者から「大人がまじめに頑張る姿を子どもたちに見せてあげたい。そして、社会の中で不足しているコミュニティ作りをしていきたい」「個人としての自分の習慣を見直し、電気、エネルギーの節約など、楽しみながら環境問題に取り組みたい」など、今後の決意が述べられ会議の幕が閉じられました。多くの参加者が様々な出会いや“気づき”、そして決意をもって会場を後にしました。



世界では平和を願いながら争いが絶えません。絶望的なまでに続く貧困、終わることのない汚職、そして家庭崩壊。また何億年という年月をかけて自然が造り上げた美しい地球の環境も「開発」の名のもとに全て破壊されようとしています。

果たして、こうした悲劇は自然に生まれてきたのでしょうか？

様々な問題の根底を突き詰めていくと、やはり人間の行動の結果ではないでしょうか。確かに、「私たちにできること」だけで、私たちが抱える様々な問題を解決していくには不十分かもしれません。しかし、少なくとも私たちが幸せな社会を実現していくきっかけをつくるために、一人ひとりが「私たちにできること」「私ひとりだけでもやってみよう」という気持ちになって、何かできることを始めることが大切なのではないでしょうか。

何ごとも初めはひとりです。

そこからすべてが始まり、大きく広がります。

世界の家族の一員として、『少しでも世界の問題が自分のこととして身近に感じられたら』あなたの身のまわりから、何かできることを始めてみてはいかがでしょうか。この日本から、あなたが世界に貢献できる一人になれるなんて、とても素晴らしいことだとは思いませんか。

それには、「まず自分から ....」

## 事務局便り

◇ 今年のMRA国際会議開催にあたっては、運営委員の方々が中心となって事前の準備の段階から当日の会議の運営のお手伝いまで、たくさんの方々に参画をいただきました。加えて、今年もMRA女性の会の方々の初め、プロの通訳者の方々やボランティアとして諸準備をお手伝い下さる方など多くの方々のご厚意も頂戴致しました。こうした皆様方のおかげでとても活気のある会議となり、大変好評を得ることも出来ました。ここに、改めて皆様のご支援とご協力に心より感謝申し上げます。

2日間という短い会議ではありましたが、それぞれの参加者が、「自分にできること」を見出し、家庭や職場、そして地域においてこの2日間で学んだことを実践・実行に移す決意をし会場を去られました。

この会議に参加されたある女性は、ボスニア・ヘルツェゴビナのマーキン大使のお話を聞かれて、「自分にもコンボ難民の人たちのために何かできるはずだ」と考え、大学の同窓生の方々に働きかけて、「コンボ難民の人たちのためのチャリティーコンサート」を計画されました。そして、来る9月14日(火)に、コンボをはじめ、世界中の援助を必要としている人々のための『世界の難民のためのチャリティーコンサート』が実現することになりました。(詳しくは同封のご案内をご覧ください)ぜひ、たくさんの方々にご参加をいただきたいと思っています。そして、来年、西暦2000年のMRA国際会議は、今年の会議でそれぞれが決意し、実践したことが報告しあえるような場になりたいと思っています。

## 国際MRA日本協会 事務局案内図

〒150-0022 東京都渋谷区恵比寿南 3-7-5  
東光苑マンション802  
TEL:03-5721-6861  
FAX:03-5724-6880  
E-MAIL:LEB03055@nifty.ne.jp

### ●最寄駅

- JR山手線 : 恵比寿駅西口下車 徒歩7分
- 地下鉄日比谷線 : 恵比寿駅5番出口 徒歩5分
- 東急東横線 : 代官山駅 徒歩4分
- 東急東横線 : 中目黒駅 徒歩5分

